

巻頭言

変わらなければ

大阪河崎リハビリテーション大学 中越 雄也

タイトルの言葉には続きがあり、全文は「変わらなければ、破滅することになる」である。この言葉は、スペンサー・ジョンソンの著書「チーズはどこへ消えた？」の一節であり、私が変わり続けることを支えてくれた名著である。近年、作業療法教育の現場には無数の変化の波が押し寄せており、正に変わらなければならぬ状態にある。その中でも、クリニカルクラークシップ（CCS）と、初等中等教育の変化について述べる。

私は、訪問作業療法の中で学生2名を同時に担当したCCSを実施してきた。当初は、従来の臨床実習からCCSへ変えることにも、2名同時に学生を担当することにも、質の高い教育になるのだろうかという気がかりがあった。だが、変わらなければと、新しい理学療法士作業療法士養成施設指導ガイドラインが適用される前から取り組んだ。私がCCSで臨床実習を始めて一番驚いたことは、学生に活気があふれ、学ぶ意欲が高まってくることだった。従来の臨床実習でも、学生からは「勉強になります」といった声は聞いていたが、実習が進むにつれて疲れ果て、学ぶための活力を失っていたことに気づかされた。CCSを実施した一部の学生からは、「実習中はアルバイトもしていないため、養成校に通う生活よりも健康的で充実している」という話があるほどであった。学生2名の同時担当は、2人同時に説明することに最初は戸惑ったが、学生同士で教えあったり、練習したり、ディスカッションをしたりすることができて指導しやすく、指導者への負担が緩和した。学生自身も同じ養成校の見知った人がいるだけで、実習のストレスが緩和されているように感じた。余談ではあるが、自動車での移動時間のある訪問作業療法での臨床実習は、長い移動時間を学生への指導にあてることができるため、最も優れた教育現場であると私は考えている。学生に動物アレルギーなどがないかといった配慮は必要であるが、訪問作業療法の実習地が増えていくことを期待したい。

次に、初等中等教育の変化について述べる。社会のデジタル化はコロナ禍によってさらに進み、私の子供も小学1年生からノートパソコンを持って登校している。初等中等教育におけるICT教育の普及は、すでにタイピング速度の向上という成果を上げている。また、普及してきた対話型AIが、今後のICT教育にどのように組み込まれるか変化は未知数である。変化はICT教育だけでない。中等教育では2022年から金融経済教育が義務化され資産運用などを学んでおり、高校生の職業選択に影響を与えるかもしれない。昨今、少子化の影響で養成校では入学者数の減少に悩まされているが、初等中等教育の変化にも目を向けて、魅力的な作業療法教育になるよう変化を起し続ける必要があると私は考えている。

最後に、冒頭の書籍の言葉を2つ紹介する。

「早い時期に小さな変化に気づけば、やがて訪れる大きな変化にうまく適応できる」

「変化を楽しもう！」